

令和 6 年 6 月 4 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19H01295

研究課題名(和文)「感情体制」と生きられた感情 エゴドキュメントに見る「近代性」

研究課題名(英文)"Emotional Regime" and experienced emotions: Modernity and Ego Documents

研究代表者

小野寺 拓也 (Onodera, Takuya)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授

研究者番号：20708193

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,600,000円

研究成果の概要(和文)：ヤン・プランパー氏(ロンドン大学ゴールドスミス校教授・当時)を招いての国際ワークショップを、2021年4月にオンラインで開催した。240名を超える参加があり、日本においては目新しい領域である感情史研究を今後推進していくうえで重要な場となった。本シンポジウムの内容は、現代史研究会の雑誌『現代史研究』第67号(2021年12月)において活字化された。また2022年6月には日本ドイツ学会大会で「19世紀における「感情史」 日独比較を通じて」を実施し、研究成果を公表した。外国雑誌での研究成果の発表が進捗中である。『現代思想』2023年12月号では、小野寺と森田が感情史の諸問題について討論を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、直感や気分、感性といった言語化しがたい要素によって、ある集団の感情体制がどのように構築されているのかについて、19世紀～20世紀の日本とドイツを比較してきた。そのさい、本研究は感情体制を国家と同一視して「日本的」「ドイツ的」な感情規範を抽出するのではなく、多層的な「感情体制」として双方の社会を読み解くことで、これまで論じられてこなかったような共通点や相違点を浮き彫りにしてきた。とくに「楽しみ」の互酬原理、花火の身体性、ロマン主義と「心」「情」と「徳」の二項対立など、日本とドイツの歴史を考察する上でこれまでほとんど見出されてこなかった論点を抽出することに成功した。

研究成果の概要(英文)：An international workshop was held online in April 2021 with Jan Plumper, Professor at Goldsmiths, University of London. 240 people participated, making it an important venue for promoting the history of emotions, a new field in Japan. The contents of this symposium were printed in "Research in Contemporary History", No. 67 (December 2021). In June 2022, we presented "The History of Emotions in the 19th Century: A Comparison between Japan and Germany" at the Congress of the German Studies Association of Japan, and published the results of our research. The publication of research results in foreign journals is in progress. In the December 2023 issue of "Gendai Shiso", Onodera and Morita discussed various issues in the history of emotions.

研究分野：西洋史

キーワード：感情史

1. 研究開始当初の背景

かつて主流であった経済還元論的なマルクス主義歴史学にかわり、1970年代以降歴史学において中心的な地位を占めるようになったのが社会史研究である。社会史は因果関係の規定に社会的要因を措定し、歴史解釈の理論としての優位性を発揮したが、この潮流に異議を唱えたのが、1980年代以降猛威をふるったポスト構造主義や言語論的転回であった。思想・文化のもつ規定性を重視し、言説の自律性、言説・実践による社会の構築を強調した。だがそこでも言語決定論というかたちでの還元論的思考は続いており、「作者の死/主体の死」といわれるように、歴史において個人の果たした役割は軽視されがちであった。

経済 社会 思想・文化と一回りしたうえで再び歴史における「主体」に着目しているのが、近年の「ポスト言語論的転回」といわれる潮流である。エイジェンシー(行為主体性)や個人の語りを重視し、個人が遺したいいわゆるエゴドキュメント(詳細は後述)を史料として利用する。しかしそこで言われる「主体」は、かつて想定されたような、自立した個人が自らの自由意志に基づいて行動するという啓蒙主義的なそれではない。ポスト構造主義が明らかにしたスクリプトやパフォーマンスといった枠組みを踏まえつつも、そうした構造に必ずしも収斂しないエイジェンシーのありようを解明しようとしているのである。

そのさいとくに注目されているのが、感情や情動という側面である。感情はきわめて個人的なものであると同時に、どのような感情が好ましいか/好ましくないか、感情表現はどのように行うべきかが社会的に規定されているという点で、すぐれて集団的なものでもある。「個と全体」という古くて新しいテーマ、しかし方法論的に近年長足の進歩を遂げつつある問題を考える上で、感情は格好の焦点となりうる。

事実、アメリカでは21世紀に入ってから感情史研究が急激に増加し、それに刺激を受ける形でドイツ、イギリス、オーストラリアなどで感情史研究を組織的に推進するグループやセンターが、2008年以降に次々創られてきている。そこでは、名誉・共感・恥・不安・憤激といった個別的感情の研究、事典の項目を手がかりにした感情の概念史、感情教育の歴史、音楽と感情の関係、宗教感情などに関する数多くの個別研究が生み出されるだけでなく、感情が時代の文脈のなかでどのような政治的、社会的圧力と変化の方向性を生み出すのかという、いわば歴史における従属変数としてではなく、独立変数としての感情に注目した方法論も提唱されている(「エモーションロジー(感情の型、規範)」、「エモーティヴ(規範にあわせた感情の発話のありよう)」など)。

2. 研究の目的

そこで本研究が着目するのが、「感情体制」という概念である。提唱者であるウィリアム・レディによれば、感情体制とは感情表現の規範を与え、それを守らせようとする力(権力)のことである。公的な儀礼や実践を通じて規範的な感情が教え込まれ、そこから逸脱した感情は回避されるよう強制される。なぜならそうした感情的規範なしには、安定した政治体制を構築することが難しいからである(*The Navigation of Feeling*, Cambridge, 2001)。

本研究の第一の目的は、直感や気分、感性といった言語化しがたい要素によって、ある集団の感情体制がどのように構築されているのかを考察することである。そこでいう集団は、日本やドイツといった国民国家、あるいは王権や藩といった身分制国家でもありうる。武士や農民、市民などの身分集団、軍隊組織、「男らしさ」「女らしさ」といった抽象的なジェンダー規範でもありうる。本研究は感情体制を国家と同一視して「日本的」「ドイツ的」な感情規範を抽出するのではなく、多層的な「感情体制」として双方の社会を読み解くことで、これまで論じられてこなかったような共通点や相違点を浮き彫りにすることを目指している。

しかしすでに述べたように、感情はすぐれて個人的なものでもある。感情体制によって要求される規範と、個人によって抱かれ、表出される感情にはズレがあることが通例である。人びとは規範を意識しつつも、時にそこから逸脱する感情を噴出させ、それがうねりとなったとき、感情体制を脅かす存在ともなる。こうした感情の噴出は、感情体制から見れば非合理的で抑圧しなければならないものと映るが、歴史主体の側からは一定の「合理性」を伴う切実な要求であることが少なくない。心理学者のダニエル・カーネマンによれば、人間の意志決定には二つの異なるモードが併存しているという。常に自動的に高速で働き、負荷がかからないが、感情的・直感的で錯覚やバイアスに支配されやすいシステム1と、論理的で込み入った判断が可能だが、作動させるには時間と努力を要するシステム2である。そして、人間の認知負荷量には限界がある以上、大半の物事は高速回転するシステム1によって自動処理されているのが現実だという(『ファスト&スロー 上』早川書房, 2014)。

本研究の第二の目的は、このシステム1が、19世紀以降の近代社会において人々によって必要とされ、実際に起動するメカニズムをエゴドキュメントから明らかにすることである。エゴドキュメントとは歴史主体によって「一人称」で書かれた史料をさし、具体的には日記、手紙、自叙伝、インタビューなどが含まれる。さらに広義のエゴドキュメントとして、裁判記録や警察・行政官による民情報告など、公的文書ではあるものの、人々の動向や感情について詳細に記録している史料を含めることもある。急激な時代の変化、状況を見通すことの困難さ、信頼できる情

報の欠如など、システム2を起動させることが困難な外因、さまざまな制度・組織や規範への精神的紐帯や人間的な結合、思考の経路依存性など、システム1を支持する内因の双方から明らかにすることで、近代社会において合理主義が進むなかで、にもかかわらず(あるいは、だからこそ)感情や情動といった「非合理的」とされる要素が果たす役割やそれが起動する具体的なメカニズムを解明することが目的である。

3. 研究の方法

4年間の研究期間内に明らかにすべき課題は、第一に、19世紀から20世紀前半にかけての日本およびドイツの感情体制を、とくに国民国家形成期と総力戦体制期に着目して、その歴史的文脈のなかで明らかにすること。第二に、感情や直感が必要とされ人々の行動基準となっていくメカニズムを解明するために、多様なエゴドキュメントの分析を行い、そのメカニズムの外因・内因を明らかにすることである。

そうした目標を達成するため、本研究では、日本史、ドイツ史でそれぞれグループを構成することで、「感情体制」をめぐる問題群の精緻化を図る一方、そのグループをさらに19世紀、20世紀のサブグループに分け、日本史・ドイツ史の枠をまたいでそれぞれの時代ごとについても議論を重ねることで、比較史の枠組みを構築する。全体研究会では感情史に関する総合的な文献を合評し、個別研究の成果を共有する。くわえて、海外研究協力者の講演や彼らとの意見交換が必要になる。

小野寺が、本研究プロジェクト全体の統括を行う。各研究班の研究成果を回収し、多層的な「感情体制」の理論化を行う。研究分担者・研究協力者間の連絡をはかり、互いの研究成果を報告し合う場として国内研究会を組織する。また、研究の遂行に支障が生じた場合、研究計画の修正案を立てる。

<日本班>

池田勇太は、19世紀後半における日本の近代国家形成過程、特に明治維新における社会的な不安、あるいは不平と忍耐という問題を取り上げる。三ツ松誠は、19世紀を生きた松山の神職三輪田家の三兄弟の視点から、身分制社会が解体され、近代国民国家が形成される過程における感情体制の変化を検討する。平山昇は、いったん形成された明治国家が日露戦後の社会動揺や天皇の代替りを機に大きく変質していくことをふまえ、大正・昭和初期における感情レベルでの国家神道ナショナリズムの浸透過程に着目する。

<ドイツ班>

それぞれ研究対象の時期は異なるものの、いずれも同時代の日本を常に意識しつつ、ドイツの近代化、国民国家形成のあり方、そしてナチズムとそれに至る道への関心を共有する。森田直子は、「長い19世紀」における学生による決闘試合を検討する。決闘試合を行った当事者のみならず、外国人観察者などの視点を通じ、当時のドイツに特有と思われる「名誉」の感情や、「苦しみ」などの普遍的な感情をあぶり出す。山根徹也は、民衆の祭りの歴史を「愉しみ」という感情をキーワードに、ドイツの19世紀において、民衆の祭りのありかたの変化と、政治権力の政策がどのように関わったかを、警察や地方行政官の治安対策関連の文書の分析を通じて、明らかにする。小野寺拓也は、第二次大戦期に書かれたドイツと日本の兵士による野戦郵便と日記を比較し、そこでの感情の現れ方の共通点と相違点を明らかにする。

<感情体制をめぐって>

すでに述べたように、「感情体制」は国民国家とイコールではない。たしかに小野寺はナチ体制下の「民族共同体」、平山は20世紀前半における日本社会を主たる考察対象とするが、池田や三ツ松、山根の場合には藩やプロイセン王権という、身分制社会に立脚する政治支配体制が重要である。また、百姓・武士のような身分集団(池田・三ツ松)、軍隊(小野寺)、学生組合(森田)、民衆によるソリアビリティ(山根)のような組織や中間団体、あるいは「男らしさ」(小野寺・森田)のようなジェンダー規範においても、感情体制と呼べるような権力が存在していたのであり、国家の感情体制との重層性においてこの問題を把握する。

<エゴドキュメントについて>

本研究において主な史料として利用されるエゴドキュメントは、日記と手紙である。日本兵・ドイツ兵が書き記した野戦(軍事)郵便と日記(小野寺)、決闘試合を様々な形で経験した人々の手紙(森田)、現長野県南部の武家・豪農の日記(池田)、三輪田三兄弟の日記(三ツ松)、皇室ゆかりの「聖地」(国家的神社と天皇陵)参拝者の日記(平山)がそれにあたる。森田は回想録も用いる。また警察や行政官による民情報告(山根)も、慎重な史料批判を必要とするものの、広義のエゴドキュメントとして理解しうる。もちろん本研究ではこうしたエゴドキュメントに加え、先行研究で多用されてきたメディア史料(新聞・雑誌)についても感情史の観点から再解釈を加え、「感情体制」のありようを明らかにする。

4. 研究成果

(1) ヤン・プランパー氏との国際シンポジウム開催

コロナ禍により延期となっていた、ヤン・プランパー氏(ロンドン大学ゴールドスミス校教授・当時)を招いての国際ワークショップをオンラインで開催することとし、2021年4月に開催した。本科研は令和元年度、メンバーの協力を得てプランパー氏の著書『感情史の始まり』(みすず書房)を訳書として刊行しており、本シンポジウムはその書評シンポジウムとして開催された。

現代史研究会の協力のもと、その4月例会として実施された(パブリックヒストリー研究会との共催)。プランパー氏による基調講演のあと、科研メンバーの平山昇、南アジア近代史の粟屋利江氏、イタリア現代史の小田原琳氏、そして感情心理学の大平英樹氏によるコメントが行われ、活発な議論となった。240名を超える参加があり、まだ日本においては目新しい領域である感情史研究を今後推進していくうえで重要な場となった。本シンポジウムの内容は、いずれも現代史研究会の雑誌『現代史研究』第67号(2021年12月)において活字化された。

(2) 日本ドイツ学会大会での研究報告

2022年6月の日本ドイツ学会大会において、「19世紀における「感情史」 日独比較を通じて」を実施した。

本大会がとくに19世紀に焦点を当てたのは、義務教育の浸透やメディアの発達、徴兵制などによって国民形成が進んでいく大衆社会とは異なり、国民国家が出来る前の19世紀において、権力はどのようにして人びとの感情を統制しようとしていたのか、人びとはどのような「感情の共同体」の中で過ごし、どのような感情的発話を試みたのかといった問題が、これまで十分に検討されてこなかったためである。感情史の日独比較を通じて、どのような理論や枠組みを作り出すことができるのかについて、大きな議論を行うことも、大きな目的であった。

本大会では、山根徹也が1835年のプロイセン国王誕生日に王都ベルリンで起きた暴動を事例研究の対象とし、民衆の感情の論理のようなものがいかなるものであったか、それが王権にとってどのような意味を持っていたかを考察した。三ツ松誠は本居宣長以降の国学者を事例に、19世紀日本における社会体制の変化と、感情を顕す媒体としての和歌の在り方の変化との相互関係を論じた。池田勇太は19世紀中葉の熊本藩において、朱子学の実践に挑んだ武士たちの記録をもとに、彼らが道徳的な規範に心を合わせようとした努力の軌跡をたどった。

これらの検討を経て、酒を振る舞ったり「殿様祭り」を祝ったりするような「楽しみの互酬原理」、花火の身体性やそれが権力によって規制されていくシステム、ドイツにおける疾風怒濤やロマン主義、日本における「心」「真心」「情」と「徳」の二項対立など、これまで歴史学において検討すらされてこなかったような意外な共通点、比較の視座が浮き彫りになった。

これらの研究成果をドイツでもシンポジウムを開催することで公表することを本科研では計画していたものの、コロナ禍によって実現できなかった。だが、研究成果の外国語翻訳を着実に進めている。研究分担者池田は英語、小野寺はドイツ語に自身の研究成果を翻訳し、ヨーロッパの研究者の意見を求めた。掲載にふさわしい雑誌についても提言を受け、掲載に向けた準備を現在進めている。

(3) 『現代思想』の特集号「感情史」

『現代思想』2023年12月号は「感情史」をめぐる特集号となり、その巻頭において研究代表者小野寺と研究分担者森田が、感情史の諸問題について討論を行った。「感情史」について、いまだ社会的な認知が進んでいるとはいえない現状にあって、その特徴や課題について幅広く周知する重要な場となった。具体的には、なぜいま「感情」というテーマが社会的関心を呼んでいるのか、感情史研究はどのような来歴をたどってきて、今後どのような可能性があるのか、「心性」との違いは何か、心理学や脳科学の議論とはどのような関係にあるのか、ジェンダー史と感情史にはどのような接点があるのか、歴史学において今後どのような位置を占めることになるのか、といった点について詳細な議論を展開した。

感情史研究がアカデミックな世界を越え、社会に幅広く認知されるうえで重要な場となった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計31件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 11件）

1. 著者名 小野寺拓也	4. 巻 50(1)
2. 論文標題 ティルマン・アレルト『ドイツ式敬礼』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 177-183
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小野寺拓也	4. 巻 42
2. 論文標題 （書評）桑原ヒサ子『ナチス機関誌「女性展望」を読む 女性表象、日常生活、戦時動員』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Flaschenpost	6. 最初と最後の頁 8-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小野寺拓也	4. 巻 1017
2. 論文標題 2021年度歴史学研究会大会報告批判 全体会	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 31-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小野寺拓也	4. 巻 67
2. 論文標題 解題（小特集「四月例会」）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代史研究	6. 最初と最後の頁 31-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小野寺拓也	4. 巻 6
2. 論文標題 「歴史総合」への期待と課題	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 山川歴史PRESS	6. 最初と最後の頁 1-5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 森田直子	4. 巻 13
2. 論文標題 感情史とは何か	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 臨床心理学増刊	6. 最初と最後の頁 67-72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小野寺拓也	4. 巻 695
2. 論文標題 『ナチのプロパガンダとアラブ世界』のあとさきーグローバル・ヒストリーとしてのファシズム 3	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 みすず	6. 最初と最後の頁 22-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小野寺拓也	4. 巻 698
2. 論文標題 感情史の視点からみるナチ体制 「喜び」の動員と余暇・娯楽	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 みすず	6. 最初と最後の頁 12-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小野寺拓也	4. 巻 20210314
2. 論文標題 なぜナチズムは「国家社会主義」ではなく「国民社会主義」と訳すべきなのか	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代ビジネス	6. 最初と最後の頁 なし
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 三ツ松誠	4. 巻 69(12)
2. 論文標題 本居内遠の文事	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本文学	6. 最初と最後の頁 11-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Mitsumatsu, Makoto	4. 巻 5
2. 論文標題 The Successors of Hirata Theology	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Religious Studies in Japan	6. 最初と最後の頁 53-80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 森田直子	4. 巻 5(1)
2. 論文標題 歴史学は感情をどう扱うのか 罵りをめぐる感情史の一試論	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 エモーション・スタディーズ	6. 最初と最後の頁 45-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20797/ems.5.1_45	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山根徹也	4. 巻 66
2. 論文標題 書評 芝崎祐典『権力と音楽：アメリカ占領軍政策とドイツ音楽の「復興」』（吉田書店,2019年）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代史研究	6. 最初と最後の頁 47-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小野寺拓也	4. 巻 682
2. 論文標題 「ファシスト・インターナショナル」 グローバル・ヒストリーとしてのファシズム 1	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 みすず	6. 最初と最後の頁 12-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小野寺拓也	4. 巻 688
2. 論文標題 「ファシスト・インターナショナル」 グローバル・ヒストリーとしてのファシズム 2	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 みすず	6. 最初と最後の頁 14-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小野寺拓也, 西山暁義	4. 巻 22
2. 論文標題 占領地からのラブレター ベルギー人少女からドイツ人兵士への手紙(1)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 クアドランテ	6. 最初と最後の頁 255-278
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小野寺拓也, 西山暎義	4. 巻 54
2. 論文標題 はじめに(シンポジウム「ヴァイマル100年 ドイツにおける民主主義の歴史的アクチュアリティ」)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ドイツ研究	6. 最初と最後の頁 3-5
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小野寺拓也, 西山暎義	4. 巻 54
2. 論文標題 (翻訳)ベンヤミン・ツィーマン「100年後のヴァイマル共和国 歴史化と現在化のはざままで」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ドイツ研究	6. 最初と最後の頁 6-17
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小野寺拓也	4. 巻 11
2. 論文標題 過去の人びとの手紙を読むということ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 peria	6. 最初と最後の頁 46-47
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小野寺拓也	4. 巻 2019.07.15
2. 論文標題 女性が「怒る」ことになぜ社会は不寛容なのか、その歴史的経緯 「感情史」の視点で考える	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 現代ビジネス	6. 最初と最後の頁 なし
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小野寺拓也	4. 巻 128(6)
2. 論文標題 新刊紹介) ジェイムズ・Q・ウィットマン、西川美樹訳『ヒトラーのモデルはアメリカだった 法システムによる「純血の追求」』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 史学雑誌	6. 最初と最後の頁 99
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小野寺拓也	4. 巻 855
2. 論文標題 (書評) 清水雅大『文化の枢軸ー戦前日本の文化外交とナチ・ドイツ』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本歴史	6. 最初と最後の頁 107-109
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小野寺拓也	4. 巻 12
2. 論文標題 (書評) 中村江里『戦争とトラウマ 不可視化された日本兵の戦争神経症』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 同時代史研究	6. 最初と最後の頁 100-104
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小野寺拓也	4. 巻 80(2)
2. 論文標題 (書評) 山室信一ほか編『われわれはどんな「世界」を生活しているのか 来るべき人文学のために』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 史苑	6. 最初と最後の頁 193-199
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 平山昇	4. 巻 46
2. 論文標題 メディア史に鉄道は入っているか？ 近代の都市における社寺参詣を事例に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 メディア史研究	6. 最初と最後の頁 1-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森田直子	4. 巻 142
2. 論文標題 メディアにみる近代ドイツの「決闘試合」(下)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 立正大学文学部論叢	6. 最初と最後の頁 65-84
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 森田直子	4. 巻 53
2. 論文標題 コメント：グローバル・ヒストリーにおける窪川とヴァッカーズドルフ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ドイツ研究	6. 最初と最後の頁 49-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三ツ松誠	4. 巻 111
2. 論文標題 『当世百歌仙』の刊行とその周辺	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 近世文藝	6. 最初と最後の頁 49-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 三ツ松誠	4. 巻 17
2. 論文標題 帰って来た王室家 明治初年の攘夷派の位置をめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 明治維新史研究	6. 最初と最後の頁 70-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中尾友香梨, 白石良夫, 三ツ松誠, 日高愛子, 大久保順子, 沼尻利通, 中尾健一郎, 村上義明, 二宮愛理, 進藤康子, 亀井森, 土屋育子, 田中圭子, 中山成一, 脇山真衣	4. 巻 14
2. 論文標題 小城鍋島文庫蔵『和学知辺草』翻刻稿(上)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 佐賀大学地域学歴史文化研究センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 95 - 115
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池田勇太	4. 巻 17
2. 論文標題 「卓越」と衆議 王政復古後の立花耆岐	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 明治維新史研究	6. 最初と最後の頁 50-69
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計17件(うち招待講演 11件/うち国際学会 2件)

1. 発表者名 小野寺拓也
2. 発表標題 書評シンポジウム ヤン・プランパー、森田直子監訳『感情史の始まり』一趣旨説明
3. 学会等名 現代史研究会4月例会(国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小野寺拓也
2. 発表標題 感情史研究の射程 ナチ体制における「感情政治」と感情的発話
3. 学会等名 日本法哲学会学術大会 2021年度学術大会「法と感情」（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小野寺拓也
2. 発表標題 歴史学とはどのような学問なのか 武井彩佳『歴史修正主義』を通じて
3. 学会等名 WINEオンライン講演会「歴史と法：歴史修正主義的な言説とどう向き合うか」（第9回研究会）（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小野寺拓也
2. 発表標題 コメント（門間卓也「戦時体制に連なる教師たちー「クロアチア独立国」のジェンダー規範を巡る考察」）
3. 学会等名 第2回WINE若手研究者研究発表会（第10回研究会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 三ツ松誠
2. 発表標題 不二道における復古神道受容の再検討
3. 学会等名 第52回明治維新史学会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 平山昇
2. 発表標題 J・ブランパー『感情史の始まり』へのコメント 日本近代史の立場から
3. 学会等名 現代史研究会4月例会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 平山昇
2. 発表標題 ラジオが育てた除夜の鐘
3. 学会等名 メディア史研究会第312回月例研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 平山昇
2. 発表標題 渋沢栄一と明治神宮 内苑との隔たり、外苑への思い
3. 学会等名 大正大学宗教学会2021年度秋期大会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 森田直子
2. 発表標題 感情史における「はざま期」 共感を手がかりに
3. 学会等名 上智大学ヨーロッパ研究所講演会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小野寺拓也
2. 発表標題 歴史的に考えるとどういう営みか 『アンネの日記』の授業実践から
3. 学会等名 ドイツ現代史学会第42回大会 シンポジウム 「ドイツ現代史研究から歴史総合へ 史料から考える歴史教育の模索 」(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小野寺拓也
2. 発表標題 書評 スーザン・L・カラザース、小滝陽訳 『良い占領? 第二次大戦後の日独で米兵は何をしたか』(人文書院、2019年)
3. 学会等名 西洋近現代史研究会1月例会(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 三ツ松誠
2. 発表標題 肥前の国学者における「道」と「雅び」
3. 学会等名 日本宗教学会第79回学術大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小野寺拓也, 西山暎義
2. 発表標題 ヴァイマル100年 ドイツにおける民主主義の歴史的アクチュアリティ
3. 学会等名 第35回日本ドイツ学会大会シンポジウム(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小野寺拓也
2. 発表標題 男性史研究は「行き詰まって」いるのか？
3. 学会等名 総合文化研究所共催講演会 閉ざされた身体 / 流れ出す身体 モデルネの身体表象（ボディ・イメージ）をめぐる（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 平山昇
2. 発表標題 電鉄と神社の協調と駆け引き - 阪神電車と西宮神社を事例に -
3. 学会等名 2019年度社会経済史学会近畿部会サマーシンポジウム「鉄道と社寺参詣 - 地域社会への影響と経済効果 -」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 三ツ松誠
2. 発表標題 平田国学における幽界交渉実在論の系譜
3. 学会等名 東アジア恠異学会第125回定例研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 三ツ松誠
2. 発表標題 西川須賀雄の初期思想
3. 学会等名 日本山岳修験学会山寺立石寺学術大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計19件

1. 著者名 三ツ松誠	4. 発行年 2021年
2. 出版社 人間文化研究機構国文学研究資料館	5. 総ページ数 219
3. 書名 幕末地方歌壇の研究：佐賀藩の場合	

1. 著者名 三ツ松誠	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ペリかん社	5. 総ページ数 304
3. 書名 歴史で読む国学	

1. 著者名 平山昇	4. 発行年 2021年
2. 出版社 京阪奈情報教育出版	5. 総ページ数 328
3. 書名 大正期の橿原神宮に関する覚書	

1. 著者名 平山昇	4. 発行年 2022年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 516
3. 書名 解説：佐藤卓己『負け組のメディア史』	

1. 著者名 池田勇太	4. 発行年 2021年
2. 出版社 清水書院	5. 総ページ数 96
3. 書名 武士の時代はどのようにして終わったのか	

1. 著者名 ヤン・プランパー、森田直子、平山昇、山根徹也、小野寺拓也	4. 発行年 2020年
2. 出版社 みすず書房	5. 総ページ数 608
3. 書名 感情史の始まり	

1. 著者名 ウルリヒ・ヘルベルト、小野寺 拓也	4. 発行年 2021年
2. 出版社 KADOKAWA	5. 総ページ数 264
3. 書名 第三帝国 ある独裁の歴史	

1. 著者名 池田勇太ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 山口大学山口学研究センター	5. 総ページ数 216
3. 書名 古代テクノポリス山口：その解明と地域資産創出を目指して：研究報告書：山口大学山口学研究センター研究プロジェクト	

1. 著者名 日本思想史事典編集委員会、日本思想史学会、三ツ松 誠ほか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 744
3. 書名 日本思想史事典	

1. 著者名 山中 弘、平山 昇ほか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 弘文堂	5. 総ページ数 384
3. 書名 現代宗教とスピリチュアル・マーケット	

1. 著者名 島園 進、末木 文美士、大谷 栄一、西村 明、平山 昇ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 春秋社	5. 総ページ数 260
3. 書名 近代日本宗教史 第二巻 国家と信仰	

1. 著者名 バーバラ・H. ローゼンワイン、リッカルド・クリスティアーニ、伊東 剛史、森田 直子、小田原 琳、舘 葉月	4. 発行年 2021年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 258
3. 書名 感情史とは何か	

1. 著者名 長谷川貴彦, 大黒俊二, 安村直己, 若尾政希, 長谷川まゆ帆, キャロライン・ステイードマン, 横山百合子, 小野寺拓也, 松井康浩	4. 発行年 2020年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 284
3. 書名 エゴ・ドキュメントの歴史学	

1. 著者名 板橋拓己、小野寺拓也（監訳）、アンドレアス・ヴィルシング、ベルトルト・コーラー、ウルリヒ・ヴィルヘルム、板橋 拓己、小野寺 拓也	4. 発行年 2019年
2. 出版社 慶應義塾大学出版会	5. 総ページ数 160
3. 書名 ナチズムは再来するのか？	

1. 著者名 藤田大誠・河村忠伸・斎藤智朗・畔上直樹・青井哲人・平山昇・藤本頼生・柏木亨介・井上兼一・高橋典史・寺田喜朗・小島伸之・福島幸宏・菅浩二・田中悟・西田彰一・高野裕基・昆野伸幸・宮本誉士・金子宗徳・小川原正道・山口輝臣	4. 発行年 2019年
2. 出版社 弘文堂	5. 総ページ数 568
3. 書名 国家神道と国体論	

1. 著者名 金澤 周作、藤井 崇、青谷 秀紀、古谷 大輔、坂本 優一郎、小野沢 透、山根 徹也	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 340
3. 書名 論点・西洋史学	

1. 著者名 三ツ松誠・村上義明・伊藤昭弘・田久保佳寛・田中圭子・白石良夫・中尾友香梨・中尾健一郎・日高愛子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 佐賀大学地域学歴史文化研究センター	5. 総ページ数 116
3. 書名 京の雅と小城藩	

1. 著者名 小林 和幸, 池田 勇太	4. 発行年 2020年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 272
3. 書名 明治史研究の最前線	

1. 著者名 神仏分離150年シンポジウム実行委員会, 池田 勇太	4. 発行年 2020年
2. 出版社 法蔵館	5. 総ページ数 192
3. 書名 神仏分離を問い直す	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山根 徹也 (Yamane Tetsuya) (10315822)	横浜市立大学・国際教養学部(教養学系)・教授 (22701)	
研究分担者	三ツ松 誠 (Mitsumatsu Makoto) (10712565)	佐賀大学・地域学歴史文化研究センター・准教授 (17201)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	平山 昇 (Hirayama Noboru) (20708135)	神奈川大学・国際日本学部・准教授 (32702)	
研究分担者	森田 直子 (Morita Naoko) (30452064)	立正大学・文学部・准教授 (32687)	
研究分担者	池田 勇太 (Ikeda Yuta) (30647714)	山口大学・人文学部・准教授 (15501)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 現代史研究会4月例会（書評シンポジウム ヤン・プランパー『感情史の始まり』）	開催年 2021年～2021年
--	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関